

一門の人物群像



四ッ橋

交樂齋

さ

決 戦 下

一月の形浄瑠璃

——演出總形人・線味三・夫太——

(部 の 晝)

西亭作詞並作曲 榎茂都陸平振附
新 作 出

伽羅先代萩陣

竹の間御殿の段より
政岡忠義の段迄

假名手本忠臣藏

祇園一力茶屋の段

★十四日より晝夜の狂言入替上演致します★

(部 の 夜)

壽式三番叟

菅原傳授手習鑑

築地の段より
松王首實驗の段迄

本朝廿四孝

十種香の段より
狐火の段迄

昭和二十年一月元旦初日

(二十五日迄)

元旦は五日迄・晝十一時・夜四時
六日毎 日・晝正午・夜四時半

(二部開演)

● 一部料金 ●

一等席 五 圓

二等席 二圓四十錢

三等席 八 十 錢

(各等入場税共)

一等御座席は五日前より
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致し居ります

前賣切符専用電話

南 ④ 四七一 一番

一般御用の電話

南 ⑤ 三〇三 二番
三七八 八番

出陣

巴御前 (竹本相生太夫)

木曾義仲 (竹本伊達太夫)

耶黨 (竹本津磨太夫)

豊竹松島太夫

豊竹呂和太夫

鶴澤清二郎

野澤吉三郎

豊澤新三郎

豊澤仙松

鶴澤叶太郎

木曾義仲 (吉田光造)

耶黨 (吉田多三郎)

巴御前 (吉田榮三郎)

軍法 (桐竹紋太郎)



出陣

曇戾なる平家追討の令旨を受けた源義仲の出陣に取材し、配するに、勇にして美なる巴御前の奮戦を潤色したもので、前段を能舞台とし、巴の切なる旨を容れて出陣を赦す義仲が、首途に當り、さもく天地神祇に征戦完遂の祈願をなす一條を第一景に置き、後半は、木曾軍が必勝の信念の下、瀧波に俱利迦羅等に、寡兵よく大軍を破りたる合戦の様を、巴御前によりて、物語的に、或は寫實的に、秋の高原の舞台面を背景として夢幻的化した、一小史傳の所作物であります。

これは大敵と言へども恐れぬ必勝の信念敬神祖宗の古來の美德、また、勇なる中に情に篤き皇軍の武士道精神を不知不識の中に昂揚する畫卸し以來絶讃の新作——。

床本抄

今ぞ秋得し出陣の、今ぞ秋得し出陣の、壽水の秋の嬉しさよ。されば保元も夢の跡、雨露に幾年木曾木立、今日ぞ錦の晴衣、これは清和源氏の嫡流、木曾冠者義仲にて候、さても平家の一族、月に浮かれ花に戯れ、奢修専横に四海亂れ、我意曇戾に宸襟を御惱し奉る事、沙汰の限りにあるべき所畏くも今度、逆徒追討の令旨を賜りて候、さらば疾く出陣致して、叡慮を安んじ奉らばやぞ存じ候。(中略)皇威に背く逆徒ばら、鎮め給へぞ祈願ある。軍を進めて東國や、轉々伊勢路の悪鬼共、その時田村將軍は、其の時田村將軍は、無勢を以つて鬼神が中、無二無三に割つて入り、八面六ひの勢に、悪鬼忽ち亡びけり。人間業にあらざりし、神の御業に外ならず、神の御業に外ならず。これぞ八洲の軍神、これぞ誠の神の國。御加護の程ぞかしこれ、御加護の程ぞ尊けれ。いざ／＼故智に我れもまた、尊き令旨を畏みて、今出陣の門出に、祈り拜せん萬神、祈り拜せんよろづ神。

伽羅先代萩

竹の間の段

竹本源 太夫
野澤松 之輔

鶴喜代君 吉田光次
一子千松 吉田龜夫
乳母政岡 桐竹紋十郎
八井沙岡 吉田光造
沖井小牧 桐竹紋司
女醫小 吉田小兵吉
忍 吉田多三郎

御殿より政岡忠義の段迄

豊竹呂太夫
鶴澤友衛門
竹本重太夫
仙 糸

鶴喜代政岡 桐竹紋十郎
一子千松 吉田光次
八井沙岡 吉田龜夫
沖井小牧 桐竹紋司
榮の御前 桐竹門造



伽羅先代萩

竹の間の段より御殿政岡忠義の段迄

人口に膾炙されて居る点でも、この淨瑠璃は今日流行の曲目中屈指の作であり

ます。伊達騒動を脚色した戯曲の中では最も有名な作品で、作者には松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の名が見え、天明五年江戸の結城屋の勾欄にかかつて居ります。全編九段仕立て、第一が舟岡山、鄧蜀山、第二が伊達義綱上屋敷門外、第三が貝田屋敷、第四が浮世渡平住家、豆腐屋、第五が近江堅田浦、道行、第六が御殿、第七が明衛屋敷の上使、第八が定倉屋敷、第九が対決になつて居り、中にも六つ目の竹の間から政岡の飯焚き、千松殺しが有名なこぼれ云ふまでもありません。

奥州五十四郡の城主伊達義綱は江戸の吉原の傾城高尾太夫に溺れ、國政を顧みない所から、奸臣仁木彈正はじめ悪人一黨は公儀へも憚りありと義綱を隠居させ、幼君鶴喜代君一人のお家様領を企てゝゐました。乳母政岡は幼君を守つてゐましたが、彈正はじめその一黨の奸策幼君毒殺の計が着々

さすゝめられて居るのを政岡は知つて
ゐました。それ故、幼君のたべ物もす
べてを御殿で自ら炊いて差上げてゐま
した。政岡の一千千松は鶴喜代君のお
相手役として、御殿へ上つてゐましたが
今日も御殿で千松が、侍の子はひもじ
いめをするのが忠義、食べる時は毒で
も何でもお主の爲にはたべる、と云ふ
のを聞いて政岡は我が子ながら健氣な
ものよと涙ぐむのでした。

政岡がいつもの様に幼君の御膳を拵
へて居る間千松は雀の唄を歌つて幼君
の御機嫌をとつてゐました。やがて御
膳も出来、千松の毒味に喜んで握飯を
たべる鶴喜代君の心根を政岡は勿體な
いものに思つてゐる。折から梶原様の
奥方御入りなり、と云ふ聲に政岡は、
何はともあれお通し申せと千松にはい
つもの事を云ひ含めて奥へやりませ
と、やがてしとくしとく之間へ通つた

のは榮御前、政岡はじめ沖の井八汐もこれ
を出むかへます。

榮御前は夫梶原に代つて鶴喜代君の病氣
見舞に來たのでした。それに持參の菓子折
は頼朝公よりの下され物と云ふのでした。

榮も八汐も曲者、彈正一味の何を企んで
居るか知れない人物です。榮持參の菓子折
を八汐は引取つて早速鶴喜代に奨め様とし
ますが、何と云つても頑是ない幼君はこれ
に手を出さうとするので政岡は押し止めま
す。

傲慢な榮は、何疑ふて食べさせぬ、是非
さもこの榮が食べさせる、と強引ですが、
政岡もこれにははたさ當惑し返答に窮して
しまひました。其處へ奥から走つて出た千
松は、その菓子欲しいと云ふなり獨んで口
へ入れますので、八汐も榮も驚くうちに千
松は七轉八倒、果してそれは毒を仕込んだ
菓子だつたのです。八汐はすかさず千松の
首筋引寄せて懐剣で突きさし、お上へ對し

慮外の千松この通りと、なぶり殺しにする
のでした。

政岡はちつと堪らへて居た。これでもか
く、と云ふ八汐に又別の奸計のあるのを見
抜いて居たからであります。

一同を別間へ引取らせた榮は政岡に事の
たくみの始終を明し、悠々と歸つて行きま
す。榮は政岡がてつきり同腹中の者と思ひ
込んだのです。それは、最前八汐が殺した
千松は實はさりかへ子の鶴喜代だと思つて
ゐたからなのです。

榮を見送つた政岡ははじめて我に返り、
慘らしく殺された千松の死骸を抱きしめ、
その忠義を讃め、又幼君の御武運を守る神
佛に謝しつゝ、我が子の殺される様に涙一つ
見せず堪へた政岡の心情は忠義の塊りであ
りました。今は母として前後亂れて泣き
叫ぶ政岡でした。

假名手本忠臣藏

祇園一力茶屋の段

由良之助 竹本大隅太夫
 力 彌 竹本津磨太夫
 重太郎 豊竹呂太夫
 喜太八 竹本源太夫
 彌五郎 竹本濱太夫
 仲 居 豊竹松島太夫
 おかる 竹本伊達太夫
 仲 居 竹本八十太夫
 仲 居 豊竹呂和太夫
 享 主 豊竹富太夫
 豊竹司太夫
 伴 内 豊竹富太夫
 豊竹司太夫
 九大夫 竹本重太夫
 平右衛門 竹本相生太夫
 前 編 澤清 八
 後 野澤喜左衛門 五郎



假名手本忠臣藏

祇園一力茶屋の段

大星由良之助の心底を探らんとして、かねて師直方に内通してゐる斧九太夫は、師直の腹臣伴内を同道して祇園の茶屋へ來ましたが、思ひの外の由良之助の放埒に二人はまづまづ安心するのです。が、山科から力彌が何やら密書らしき物を携へて來たので、九太夫は伴内を先に歸し自分はその文面をたしかめる可く縁の下に忍ぶのでし

た。

と、刀を取る振りで姿を見せた由良之助が、釣燈籠の灯に躡して件の文を讀み始めるが、それを二階のおかるは鏡に寫し、又縁の下では九太夫が盗み讀みするのでした。然しおかるの落した簪の音に文を後ろに隠した由良之助は、巻き行く文のちぎれから縁の下にも人ありさ氣づき、先づ二階のおかるを下すま身請の話を持ち出してそれさなくおかるに縁の下の見張りをさせて奥へ行きますが、おかるは勘平に會へる嬉しさに、いそいそとして文を認めるのでした。其處へ兄の平右衛門が來て兄妹は絶へて久しい對面を喜びますが、平右衛門は急に妹おかるが由良之助に身請されると言ふ話を聞き、暫し思案の後、扱は……と、由良之助の心を察し、不意におかるを手にかけやうとするのでした。

仔細を知らぬおかるは驚いて逃げ廻りま

壽式三番叟

千	千	翁	三	三	三
歳	番	番	番	番	番
竹本南部太夫	竹本住太夫	竹本七五三太夫	竹本雛太夫	豊竹宮太夫	鶴澤重造
野澤八造	野澤錦糸	鶴澤友平	鶴澤寛弘	豊澤猿二郎	吉田玉市
桐竹門造	吉田光造	吉田榮三郎			



壽式三番叟

初春の野頭を飾るにふさはしいこの「三番叟」は元來芝居の始る前の儀式として行つたもので、演劇の起源が神事に關聯してゐることを暗示しておりますが、「三番叟」が能の「翁」から出てゐる事は既に周知のことでございます。

歌舞伎や音曲へ入つて儀式的の場合にのみ「翁」が尊重され、見た目の娛しさ、旋律の興味は寧ろ「三番叟」の方に集められ

ました。随つて音曲では通稱「何々三番」と言ふ位に三番中心になつております。

殊に本曲では三番叟が二人出てへつ／＼になるまで踊り競べをする所が特色となつております。

さてこれは餘談乍ら、翁の白面は白色人種を、三番叟の黒面は黒色人種を、千歳の直面は黄色人種を現はしてゐると言ふ説もございませぬ。

★お願ひ

★場内では脱帽禁煙を堅くお願ひ致します

★場内は清潔に、紙屑その他の物はお互ひに一さまごめにお願ひ致します

★晴雨にかゝわらず必ず上草履を御持参下さいませ——靴、草履のお客様はそのまゝはいつて頂けるので至極便利でございます

菅原傳授手習鑑

築地の段

竹本 難太夫
豊澤 廣助

清人 梅丸 貫 桐竹 紋太郎
舎人 世相 吉田 玉徳
菅丞 桐竹 門造
御台 所 吉田 小兵吉
荒島 主 税 吉田 藤一
武部 源藏 桐竹 龜松
女房 戸浪 吉田 榮三郎
菅秀 才 吉田 光次

寺入りの段

豊竹 宮太夫
野澤 八造
野澤 鉢

松王首實驗の段

豊竹 古靱太夫
鶴澤 清六



菅原傳授手習鑑

築地の段より松王首實驗の段迄

手習ひ師匠武部源藏夫婦は、丞相の一千菅秀才を我が子に仕立てかくまつてゐました、其處へどうやら様子ありげな女房が七つばかりの男の子を連れて訪れます。名前を聞けば小太郎と云つて、菅秀才とは同じ位の年配なので戸浪はかれて源藏から話のあつた子だと悟り、母親の後を追ふをなだめつゝ機嫌を取るのです。

妻の戸浪は歸つて来た源藏に約束の寺入りの子を見てやつてくれ、小太郎を引合はせます。そ手をついて挨拶をする小太郎の顔をじつと見つけた源藏は、忽ち顔色も柔いで、喜ばしげには、あむむのです。

合点の行かぬ夫の様子に、戸浪は源藏に今日の仔細を尋ねますと、今日村の庄屋方へ行つてみると、時平の家來春藤玄蕃に病體ながら松王丸が檢分の役として附添ひ、數百人の人数で源藏を取巻き、訴人によつて源藏方に菅秀才がかくまはれてあること明白、直ちに首打つて渡すか、さなくば踏み込んで請取らうとの手づめの詰問に、源藏も是非に及ばず首打つて渡す約束して歸つて来てはみたもの、寺子達は菅秀才とは似ても似つかぬ子供ばかりなので、心の中で歎いてゐたが、小太郎を見れば、満更鳥を驚さずも云はれぬ器量に、これこそと思ひ當る所があつたのでありました。

戸浪はこれを聞いて、松王は若君の顔をよく見知つて居る筈、と心配をしますが、若し誤さ知れた時は、若君諸共死出三途の御供せん、とやがて来る玄蕃、松王を待ち受けることになりました。

やがて横柄に訪ふ春藤玄蕃、首見る役として病體の松王丸が駕籠に乗つて従つて来ました。

取	百	手	御	舍	春	武	下	一	女	よ	菅	妻
卷	姓	習	台	人	藤	部	男	子	房	だ	秀	戸
大	大	子	所	松	玄	源	三	小	千	れ	才	浪
ぜ	ぜ	大	吉	王	蕃	藏	助	太	代	り	吉	吉
い	い	ぜ	田	丸	吉	桐	吉	郎	吉	吉	田	田
		い	小	三	田	竹	田	吉	田	田	光	榮
			兵	三	龜	龜	兵	田	萬	萬	次	三
			次	三	松	松	次	龜	次	郎	郎	郎
			吉	三	三	三	三	夫	郎	郎	郎	郎

二人はすぐ源藏にこの上は寸時も早く若君の首を受取らうと厳しく促すので、源藏は意を決し首桶持つて奥へ入った。

松王はあたりを見廻して机の敷をしらべ最前歸つた子供の数より一つ多いと詰るの、戸浪は今日寺入りした子のと云ひかけて口を啣み、これぞ菅秀才のお机文庫、と漸く云ひ抜けます。

と、奥でバタリ首打つ音がして、やがて源藏は白台に首桶のせて、松王の目通りに据え置きます。松王はその首桶引きよせ蓋を明けてためつすがめつ窺ひ見た末、菅秀才の首に紛れなし、と云ひはりますので、檢使の玄蕃は大喜びです。松王はかれての願ひの通り病氣保養の暇を願ひそれ／＼出て行きます。

あゝに源藏夫婦は、張りつめた氣もゆるみ、しばしばもの言へぬばかりでした、これそ凡人ならぬ我が君の御聖徳によつて松王の眼がかすみ覆首を知らず持つて歸つた。と天地に三拜九拜するのでした。

其處に一難去つて又一難、小太郎の母が

歸つて來たのです。立ち騒ぐ戸浪を引退けた源藏は、何くはぬ面持ちで内へ迎へ入れ様子を窺つて後から只一と討ちと切り付けました。

女もしれもの、その太刀をはずしてあり合ふ我が子の文庫ではつしと受け止めました。二つになつた文庫の中からは、ばらばらと出る經帷子に南無阿彌陀佛の六字の幡、源藏はコヘいかにと、進みかれるのを女は、菅秀才のお身替り、お役に立て、下さつたか、と意外の言葉、驚いた源藏は、して其許は何人の御内障、と尋れる折しも門口から女房悦べ、伴はお役に立つたぞ、入つて來たのは先程の松王でした。

松王のこゝばを聞くよりわつと泣き出した最前の女は、松王の女房千代だつたのです。今まで敵と思つてゐた松王がこの不審な様子に、源藏は威儀を正して所存を尋ねますと、……松王は三人兄弟の中、一人はなれて時平の家來になつてしまひ、親兄弟とも肉縁を切つて恩ある菅丞相へ敵對しなければならなかつたので、何さかして主従

此
 梅下重三竹中初太夫
 相立申れ



さ

の縁を切らう
 と作病までか
 まへて暇を顧
 ったのでした
 が、今日の役
 目が済むまで
 さ、あの仕儀
 に及んだので
 した。松王は
 よもや源蔵が
 若君を打つ様
 なことはない
 と信じてゐた
 けれど、さて
 その身替りさ
 して、誰を、
 さ云ふことに
 なつて、女房
 千代と相談し
 二人の中の一
 子小太郎を、
 若君の身代り

に立てたのでした。これが松王夫婦の丞相
 へのせめてもの御恩返しだったのです。

流石に千代は女の身の心弱く、小太郎に
 別れた時の事を思ひ出して又泣き伏すので
 した。松王はけなげな小太郎の最後の様子
 を聞き、胸もちぎれる思ひがするのでした
 が、それにつけても、御恩も送らすに先立
 つた弟櫻丸の上を思ひ、涙にくれます。

序でながら若君へ御土産、さ北嵯峨から
 お連れしたと云ふ丞相の御臺所を若君に引
 合はせやがて月浪が奥から抱いて来る小太
 郎の死骸を乗物に移し入れ、松王夫婦はか
 れて用意の白装束となり、源蔵夫婦に門火
 を頼んで野邊の送りに出て立つのでした。

本曲は延享三年八月、竹本座に初演。作
 者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛で全五
 段よりなり、殊にこの第四段目切「寺子屋
 の段」が有名です。大近松作「天神記」を原
 據として時平の横暴非道、道眞の寃罪左遷
 の史實に基き、梅・櫻・松の三つ子兄弟を
 錯綜させて、巧みに忠義、恩愛、犠牲、感激、
 同情などを高調し、麗しい文章で書かれ
 た「忠臣蔵」「千本櫻」など、並んで、淨
 瑠璃作品中の代表的名作でございます。

いれにたがなかつたので、何かかして主従

本朝廿四孝

十種香の段

竹本南部太夫

鶴澤寛治郎

狐火の段

竹本七五三太夫

鶴澤綱造

鶴澤友平

鶴澤寛弘



本朝廿四孝

十種香の段より狐火の段迄

明和三年正月竹本座初演。作者には近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、竹本三郎兵衛等が名列れ、全五段に分れ、殊に第四の切「十種香の段」が名高い。所謂甲越の戦を題材とした大近松作「信州川中島合戦」(享保六年竹本座初演)に基き技巧を凝らしたもので、武田、上杉兩家の確執に足利將軍を殺した齋藤道三の謀叛を取合せた物でございます。

武田、上杉兩家は諏訪法性の兜の事から確執して居りましたが、將軍義晴の身に變事があつた爲三年間合戦を止めて其間に曲者を探す事、若しその出來ぬ時は兩家は互に一子勝頼、景勝の首を打つて渡す事を誓ひ三年間は無爲に過ぎました。

此所に信玄の息勝頼ですが、彼は奸臣板倉兵部の爲めに幼時より民間に育つて花作り箕作と呼ばれ瓜二つの兵部の子が勝頼と名乗つてゐました爲に幸に偽の勝頼が切腹し、其首が渡されたのでした。然して此所長尾館に仕へる腰元で此の偽の勝頼と戀仲の濡衣は、將軍義晴を狙撃した齋藤道三の娘で、父の意をうけて武田上杉を亡ぼさんとしてゐたのですが、戀人の死に會つて翻然、武田家の爲に上杉家から法性の兜を取り返そうと、腰元となつてゐるのでした。箕作の勝頼も亦曲者詮議と幼君の守護法性の兜取戻しの爲に、花造りとなつて此の館に入りこんでゐるのでした。又上杉家の息

武田勝頼 吉田玉助

姫 八重垣姫 吉田文五郎

腰元 濡衣 桐竹紋司

長尾 謙信 吉田小兵吉

白須賀六郎 桐竹紋太郎

原 小文治 吉田兵次

女八重垣姫は、かれて武田勝頼とば兩家和解の爲に許婚の仲でありましたが、偽の勝頼の切腹を、一圖に眞の勝頼が切腹したと思ひこみ、其繪姿に向つて、絶へ果てた縁を歎き悲しむのでした。

劇は此所から始ります。

姫のかうした様を見た勝頼の箕作は、そゞろ不惑の念に涙するのですが、濡衣は勝頼の姿が、我が亡き戀人さ瓜二つの容姿に、思はず胸さゞろかせるのでした。そして似たさば愚か、矢張り其まゝと、其足下に泣き伏す聲に、姫も襖の隙から窺へば、正しく繪姿其まゝの人が其所に居て、濡衣と言葉交して居りますので、姫は改めて濡衣に向ひ、若し此箕作が其方の知る邊でも又殿御でもないならば、戀の媒介を頼むのでした。濡衣はそれが眞實の戀ならば、仲介せまいものでもないかと、誓紙の代りに、法性の兜を盗み出して貰ひたいと云ひ

ます。姫は兜を望むとば、扱は眞の勝頼様に違ひないかと、箕作に縫つて嬉し涙にくれますが、箕作は、いつかな本心を明かさないのでした。爲に姫は、勝頼様でもない者に云ひ寄つたは辱しと、其場に自書して果てやうさしますので、此所に始めて眞實は明されたのでしたが、折柄謙信が現はれ、箕作を使ひに出すのでした。是は疾くより箕作を勝頼と見買いてゐたが爲で、其後より討手の勢を向けて討んとするのでした。そして濡衣をも引立てるのでしたが、一方姫は、手に入れた法性の兜に向ひ、勝頼の身安泰を一心に祈願するのでした。と怪しや忽ち狐火燃へ立ち、白狐の姿の池水に映るさ見へましたと、諏訪明神の神體に等しき兜、八百八狐つきそつて守護する奇瑞に疑ひなしと覺るや、忝なや有難やと兜を捧げ、爰や彼處に燃ゆる狐火に守られて、勝頼の許に急を告げに急ぐのでした。

觀賞おぼえ

昭和二十年一月 日

新作出陣

伽羅先代萩

假名手本忠臣藏

壽式三番叟

菅原傳授手習鑑

本朝廿四孝

文樂座小史 (昭和十九年三月調査)

○竹本座創立(現今ヨリ二百五十九年以前)貞享元年二月(道頓堀西ノ芝居)

○文樂座發祥(現今ヨリ約百五十年以前)天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地演時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎樓時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座焼失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マテ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける煙土藝術、三位一体の人情

浮瑠璃の日本唯一の公商榷のごぞあるす

文樂座人形浮瑠璃は 曾に大阪の誇りとす舞台藝術のみならず我日本に於ける古典舞台藝術の至寶として世界に誇れるべきものであります、従つて開演毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうにと一同不斷の努力を致して居りますすが尚御氣付きの点は御客様の御聲として承りたく存じます。

貴重品は 各自にお持ち下さいませ、お席席をお立ちの時は御携帯を願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお烟ひを致します。お席では御遠慮下さいませ。

お食事は 西側、階下に大食堂が御座あります。

賣店は 一階西側休憩所に御座あります。

お化粧とお手洗 股方は西側の二階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座あります。

場内にて 寫眞撮影は絶対にお断り申上ます。

御休憩の間は 二階西側に大休憩所の設備が御座ります。御舞當御持參の御方様は例々御利用下さいませ。

出演者 病氣其他の事故にて出舞不能の場合は乍勝手代役にて相勤めます。は右様御諒承を願上ます。

★お客様(特にお願申上ます) 物質の折柄、洵に恐れ入りますがお下駄履きのお客様は晴雨にかかわらず上草履を御持參下さいませ、特にお願ひ申上ます。

尚、草履のお客様はそのまゝ入場して頂きますのを至願便利でございます

松竹株式会社 文樂座

支配人 大橋照夫

電話南(三)三〇三番
(三)三七八番
(四)七一一番

昭和十九年十二月一日印刷
昭和十九年十二月二日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式会社大阪支店・發行者 鳥江鏡也

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式会社大阪支店內

大阪市東區市島町一丁目一
印刷所 ミカ下印刷合資會社

一部金二十錢

